

第二章 光る源氏の物語 夏の町の物語

[第一段 五月五日端午の節句、源氏、玉鬘を訪問]

*五日には(その明けた日の五月五日は端午の節句で馬場で馬弓が競われることになっていた)ので、馬場の御殿に(うまばのおとどに、夏の町の東面にある馬場見物席に)出でたまひけるついでに(出向きなざるその足で)、*渡りたまへり(同じ夏の町の西の対に殿は姫に会いに先にお寄りになりました)。*「いつか」は、注に<五月五日、端午の節句。>とある。これが、上文を前日の五月四日の話とする根拠らしい。しかし、注には騎射のことは示されていない。私には殿が端午の節句に「馬場の御殿」に出向く意味が分からないので先読みしたら、その記事があったので、此処に補記した。この補記無しに、当時の読者にはこの事情が分かったのだろうか。六条院以外に邸内に騎射が出来る馬場はそうは無かったろうに。疑問だ。なお、「季刊大林」サイトの「六条院考証」ページなどによると、馬場および馬場殿が六条院の東面に夏の町から春の町へまたがって設置されていたことは、「少女」巻第七章第四段の六条院完成時での建物類の概略説明や本帖当場面の記述などから知れる、ということらしい。*「渡り給へり」という<西の対に>という行き先を省略した書き方からして、この文節からの段立てには少なからぬ強引さを感じる。この書き方は、直前までの話題を引き継いでいる。だから、前章第六段を本章第一段とし、本段を本章第二段とすべきものに思えてならない。更に言えば、前章第六段を「源氏、玉鬘への恋慕の情を自制す」と読み間違えているから、こういう変な段立てになるのだ。前章第六段は「源氏の自制」などではなく、前章で描写した<宮への悪戯>を廻って揺れ動く殿と姫の関係を少し引いて纏めた説明であり、題すとすれば「源氏の逡巡」であり、語り口調はその視点論調のまま当段の話に続く、と読むべきだ。

「いかにぞや(どうであったか)。宮は夜や更かしたまひし(宮は遅くまでいらしたか)。いたくも馴らしきこえじ(あまり親しくし過ぎ申すな)。*煩はしき気(わづらはしきけ、話がくどくなる傾向も)添ひたまへる人ぞや(お持ちの人です)。人の心破り(そうして長居する内で、強引に)、ものの過ちすまじき人は(無体に及ぶという事が無い人は)、かたくこそありけれ(滅多に居ないものですから)」*「わづらはし」は<煩い、面倒だ>だから<しつこい、くどい>とは言えそう。ただ、<強引だ、恐ろしい>という語感ではないから、「こころやぶり(期待を裏切る)」に直接つながるといよりは、そういう状態になりやすい、というように読む。

など、*活けみ殺しみ戒めおはする御さま(褒めたり貶したりして注意していらっしゃる殿の御姿は)、尽きせず若くきよげに見えたまふ(未だに若々しく美しく見えなさいます)。*「いけみころしみいさめおはする」は「活け(て)み(たり)殺し(て)み(たりして)戒め(て)おはする」の語呂の良い言い方、なのだろう。また、「み」は「見」でそれ自体で<見方>を意味する名詞にも見えるから、意味も通じやすそう。また、「たり」は列挙用語化して、省略記号と見做される、という訳か。「活かすも殺すも」は誇張した言い方というよりは、一部の機能や性質に付いて判断する言い方のようで、それを全体で言い換えれば<良いも悪いも>。

艶(つや、光沢)も色(いろ、染色)もこぼるばかりなる(十分優れた)御衣(みぞ、御着物)に、直衣(なほし、略礼服を)はかなく重なるあはひも(ふんわりと重ね着した色合いも)、いづこに加はれるきよらにかあらむ(何処に是に勝る美しさが在ろうか)、この世の人の染め出だしたると見えず、常の色も変へぬ*文目も(いつもと変わらない直衣の綾織模様も)、今日はめづらかに(今日は菖蒲の節句だけにそのアヤメが一際見事で)、をかしくおぼゆる薫りなども(髪に挿した菖蒲草

の香りと相俟って)、「思ふことなくは(こんな変な関係で無かったら)、をかしかりぬべき御ありさまかな(どんなに清々しく見える殿のお姿だったことだろう)」と姫君思す(と姫君はお思いになります)。*「文目」は<綾織物の模様>で礼服に良く用いられるそうなので、直衣のことらしい。また「あやめ」は「菖蒲(しょうぶ、さうぶ、ショウブ)」の古名でもあり、端午の節句は菖蒲の節句だ。子供の頃、銭湯で菖蒲湯に入った時の独特の香りと催事感が懐かしい。催事の社会性に子供は感銘を受ける。

宮より御文あり(宮から御手紙がありました)。白き*薄様にて(白い光沢紙に)、御手はいとよしありて書きなしたまへり(字はとても優雅に書きなさっていらっしやいました)。見るほどこそをかしかりけれ(実物を見る分には確かに素晴らしいのですが)、まねび出づれば(こうして歌を書き出せば)、*ことなることなしや(その格別さまでは伝わらないのが残念です)。*「うすやう」は鳥の子紙・雁皮紙の薄手のもの、とのこと。雁皮紙は謄写版用紙や箔打ち紙に用いられるとあるので、ざっと光沢和紙だ。*「殊成る事無し哉」は、注に<語り手の弁。『集成』は「草子地。その場にいた女房が語り伝える体。次の歌の批評である」。『完訳』は「語り手が宮の歌を平凡と評す」と注す。>とある。しかしくたいした事は無い>という歌の批評だとしたら歌論になってしまうし、それを作者が此処で言う意図が分からない。此処は、「見るほどこそをかしかりけれ」を単に係り結びの文型での外形描写と穏やかに受けて、「まねび出づれば(こうして文だけを書き出せば)<紙や筆跡の格別さは無くなってしまいますけど>と読めば良いのではないか。文理でも、「なしや」の「や」は感嘆や強調だとすれば<歌の評価>ではなく<歌の風情の再現性>に於いて「残念」なのであり、事物を提示して判断を相手に任せる委任や疑問の助詞「~でしょうか」とも解せる、かと思う。

「今日さへや(けふさへや)引く人もなき(ひくひともなき)水隠れに(みがくれに)
生ふる菖蒲の(おふるあやめの)根のみ泣かれむ(ねのみなかれむ)」(和歌 25-03)

「今日がショウブのあやめ草、引いて外れた値の綾目」(意識 25-03)

*注に<蛸宮から玉鬘への贈歌。「根」と「音」、「流れ」と「泣かれ」の掛詞。「水隠れて生ふる五月のあやめ草長きためしに人は引かなむ」(古今六帖一、菖蒲草、一〇〇)。>とある。「菖蒲」を「あやめ」というのは、細長く先が鋭い葉に畝りの通った筋目があり、筋模様を「あや(文、綾)」と言うことからの命名だったかと思うが、そういう意味では今のアヤメもハナショウブもカキツバタも似た印象の葉っぱではありそうだが、ショウブの葉の畝の明瞭さは別格で、実に科目も他の三種がアヤメ科で美しい花を付けるのに対して、ショウブはサトイモ科で花茎が葉先まで伸びず葉の根に花穂を付けるとある。これらは例によって「花 300」サイトの写真を参照させてもらった。また、アヤメは湿地性ではなく、ショウブとハナショウブとカキツバタは湿地性とのことで、花の無い状態ならショウブとハナショウブが良く似ているらしい。つまり、此処で言う「あやめ」は今のショウブのことで、アヤメやハナショウブではない、というワケだ。紛らわしいので遠回りをしたが、引歌は「水隠れて生ふる」が湿地に生えるショウブの生態に掛けた<身を隠しても追われる>事情、「五月のあやめ草」が端午の節句に供えるショウブに掛けた<その訳はいろいろとある>理屈、「長きためしに」がその縁起物のショウブを長生きを願う例に引き抜くことに掛けた<逃げ切れるかどうかの運>試し、「人は引かなむ」が土中に隠れているショウブの根の長さを競う訳だという歌筋に掛けた<御神籤を引いてみるか>というショウブ事の符丁、にも見える。どこか荒事の風情だ。「菖蒲根合わせ」は<物合わせの一。平安時代の遊戯で、陰暦 5 月 5 日の端午の節句に、左右に分かれて菖蒲(しょうぶ)の根の長短を比べあい、和歌を詠み添えて勝負を競ったもの。菖蒲合わせ。>と大辞泉にある。しかし当歌は、「今日さへや(今日は節句だと言うのに)引く人もなき(引き抜く人もいないので)水隠れに生ふる菖蒲の根のみ(水面に隠れた菖

蒲の根だけは誰の目にも入らないままで、同様に貴女の目に入らない身の上が寂しいので声を上げて泣かれむ(菖蒲根は水中を流れるのですが、私は泣けて来ます)、という和事の風情。などと、捏ね繰ってみた。

例にも引き出でつべき根に結びつけたまへれば(記録になりそうな大きな菖蒲根に結び付け為さった歌だったので)、「今日の御返り(折角の縁起物なので、ぜひ端午の節句の今日の日(今日)に御返事を)」などそそのかしおきて(などと姫に促して置いて)、出でたまひぬ(殿は馬場殿に向かわれました)。これかれも(どの女房も)、「なほ(ぜひ)」と聞こゆれば(と申し上げたので)、御心にもいかが思しけむ(姫はご自身でも少しは面白くお思いだったのか)、「ためしにもひきいでつべきね」は前出の引歌を丸々なぞった言い方で、その洒落つ気を汲めば、言い換えは不可能だ。が、意味だけで言い換える。引歌をなぞるということは「根合わせ」を意識しているので勝負事であり、その際の「例」とは長く参照となる<記録>だ。なお、「菖蒲根(しょうぶこん、しゃうぶのね)」は漢方薬になるらしく、ゴボウみたいな根茎でヒゲ根は使わない、とのこと。

「あらはれていとど浅くも 見ゆるかな 菖蒲もわかず 泣かれける根の (和歌 25-04)

「見ればますます浅ましい、聞き分けの無い涙なら (意識 25-04)

*注に<玉鬘の返歌。「菖蒲」「根」「泣く」の語句を受けて返す。「洗はれて」と「現れて」、「文目」と「菖蒲」、「泣かれ」と「流れ」、「音」と「根」の掛詞。「洗ふ」は「水」の縁語。「現れて」は「水隠れに」の対語。>とある。他には「浅し」が<考えが浅い>と<香りが薄い>の複意。表向きは贈られた菖蒲根に対する感想風にくこの菖蒲根は、洗われてずいぶん香りが薄れたように思います、菖蒲かどうかも分からないほど洗い流されてしまった根ですから>という言い方をしている。そういう偽装が出来るから<このように御詠みになると、気を引く魂胆が見え透いて却って安っぽいですよ、分けも解からず泣いてみせる心根では>という皮肉を言い放つことが出来るのだろう。それにしても、一回り近く年上の経験豊富な宮に対して、本当に此处まで言えるものだろうか。私には、姫の勝ち気さよりも無謀さが感じられるが、そのくらい面白い姫だった、と思うことにして置く。

*若々しく(若すぎませんか) *「わかわかし」は<とても若い>でもあり<子供っぽい、おとなげない>でもある。後者の意味なら、「お若いですね」とか「お元気なこと」みたいな言い換えも出来そうだが、それが生娘の言葉だろうか。これも菖蒲根に掛けた洒落言葉で<まだ薬効成分が少ない>という言い方でもあるのだろう。

とばかり(とだけ)、ほのかにぞあめる(薄墨で書いてあるようです)。「手を今すこしゆゑづけたらば(字にもう少し深みがあれば)」と、宮は好ましき御心に(宮は風流人らしく)、いささか飽かぬことと見たまひけむかし(いささか物足りなくお思いになったようです)。

*楽玉など(くす玉や茅巻餅などの節句の品が)、えならぬさまにて(とても趣向を凝らした形で)、所々より多かり(各御方々から姫に多く寄せられました)。思し沈みつる年ごろの名残なき御ありさまにて(姫は筑紫で思い沈んでいた年月が嘘だったような今の華やいだ京都暮らしに)、心ゆるびたまふことも多かるに(本来の身分を取り返したような安堵を覚えなされることも多かったが)、「*同じくは(どうせこうして殿の庇護の元で暮らすのなら)、人の疵つくばかりのこと*なくてもやみにしがな(誰かが傷付くだけの人を気持ちを弄ぶのはもう無しにして隠し事は終りにしたい)」と、いかが思さざらむ(どうしてお思いにならないことがありますでしょうか)。 *「く

すだま」は、式典で主催者が割ると「祝〇〇」の垂れ幕が下りて紙吹雪が舞う、というイベント用品の元と成った縁起物らしく、古語辞典にも絵付きで説明されているが、今では端午の節句に限らず遊び心の装飾品として古来からの様式で販売されているようで、そうした Web サイトの見本写真が最も分かり易い。ところで、こうした魔除けのような縁起物を姫が贈られる、という文なので、そういう風習の説明を探した。「端午」についての由来や解説は Web に数多い。その中でも、此処の文の解説として分かり易いのは Wikipedia の〈日本においては、男性が戸外に出払い、女性だけが家の中に閉じこもって、田植えの前に穢れを祓い身を清める儀式を行う五月忌み（さつきいみ）という風習があり、これが中国から伝わった端午と結び付けられた。すなわち、端午は元々女性の節句だった。宮中では菖蒲を髪飾りにした人々が武徳殿に集い天皇から薬玉（くすだま：薬草を丸く固めて飾りを付けたもの）を賜った。かつての貴族社会では薬玉を作りお互いに贈りあう習慣もあった。宮中の行事については奈良時代に既にその記述が見られる。〉という記事だった。基本的に六条院内の節句の様子、と見て置く。ズレはあるだろうが、今だと手作りチョコの贈答が、風習の輸入と変容に関与するこの国の女の感性に於いて、この件のそれといくらか共通項があるのかも知れない。＊「おなじくは」という事改まった風でもない短い一言で、実は作者は蛭遊びの纏めをする魂胆だ。この一言は〈今後も自分が同じく殿の庇護の下でこの六条院暮らしを続けるなら〉という意味なので、姫は殿の女として生きる因果を観念した、という事を示している。それは諦観とも言えるものだが、この六条院の大きさと催事を通して殿の権威を目の当たりにして、此処こそが現世の栄華と実感し、情緒に癖はあるものの殿の才能と美貌に不足は無いので、姫は然程落胆していない、というのが本段での語り口調だ。つまり、宮は完全に当て馬にされて終わった、という説明でもある。だから「人」は一義的には〈宮〉だ。殿は、宮と姫を本気で一緒にさせる気は無い。この二人の人物は御し得るものと踏んでいる。勿論、不測の事態になる可能性は皆無では無く、だからこそ面白い遊びなワケだが、殿はそれなりに値踏みの上での掌で、宮と姫がどんな遣り取りをするのかを見たという好奇心でいるわけだ。だから姫は、初めから宮に本気にはなれない。姫の意志は殿の許容範囲の中だけでしか実効力は無い。宮の失恋は決まっているので、宮は傷付くだけだ。そして、事情を承知で宮を裏切る姫も自分の業の深さに傷付く。また、こうした悪行が世間に知れれば殿も傷付く、という可能性も皆無では無い。そして、人の気持ちをもてあそぶ、ということなら、藤中将からの手紙も実りが無いことでは同様だ。どんなに面白くても、実りが無いと分かっていることは「疵つくばかりのこと」と姫は思う、のだろう。なので、「人」は複数の個別事情の〈人＝誰か〉という訳だ。なので恐らくは、姫の頭と体の整理としては、早く内大臣に事情を知らせて、広く自分が藤原氏であることを知らしめて、隠し事のために何時までも内外に変な形を続けること無く、晴れて源氏殿の妻に納まりたい、という筋立てかと思う。＊「なくても」は解かり難い。現代語なら〈無いとしても〉に見える。が、「疵つくばかりのこと」は既に在るので、〈無いとしても〉では文理が成立しない。ただ、〈無いとして〉なら〈今後は無しにして〉という意味で成立する。だから、そういうことなのだろう。つまり、「も」は強調の助詞で〈もう〉に当たる。だから、「なくても」は〈今後はもう無しにして〉。

[第二段 六条院馬場殿の騎射]

殿は、東の御方にも（ひんがしのおんかたにも、東の対の御方である花散里の処にも）さしのぞきたまひて（立ち寄りなさって）、

「中将の（息子の中将が）、＊今日の司の手結ひのついでに（今日の左近の行事である天覧馬弓試合の余勢を駆って）、男ども引き連れてものすべきさまに言ひしを（部下を引き連れて来て此処で二回戦を遣りたいと言っていたので）、さる心したまへ（その心算で居て下さい）。＊「けふのつかさのてつがひのついで」は丸で呪文のように訳が分からない。が、この見慣れない語に付いて注釈は無い。そして訳文に「今日の左近衛府の競射の折」とある。「つかさ」は役所であり、官職（身分相応の役目柄）でもある。中将は近衛

府の次官だから、勤め先は近衛府には違いない。源氏中将と藤原中将とで、左右の近衛府の筆頭次官を勤めていたらしいが、源中将が左近衛という明示はあっただろうか。既に在ったか、先読みか、何れにせよ、注にこう有る以上、それは確かなのだろう。だから、「今日の司の」が<今日の左近衛府の>となるまでは一応分かった。で、「手結ひ」は「てつがひ」と読むらしいが、これが「騎射」に於ける<対戦相手の取り組み順番=勝負>のことなのだそう。 「騎射(きしゃ)」は古語辞典に<馬上で弓を射ること。うまゆみ。>とあり、特に<朝廷で五月五日に行なわれた騎射競技の行事。>ともある。つまり<五月五日の行事である天覧馬弓試合>だ。となると、「ついで」は<その折>ではなく、その<余勢を駆って>という若武者ぶりを示す文なのだろう。

まだ明かきほどに来なむものぞ(まだ明るい時分の内に来るだろうと思います)。*あやしく(普段と違って)、ここにはわざとならず忍ぶることをも(此处では朝廷行事とは違って内輪の遊び事で行う馬弓試合であっても)、この親王たちの聞きつけて(このところの姫目当ての宮たちが聞きつけて)、訪らひものしたまへば(見物に託けてお越しになるでしょうから)、おのづからことごとしくなむあるを(どうしても賑々しくなってしまうそうですので)、用意したまへ(接待の用意を頼みます)」 *「あやしく」は「ことごとしくなむある」に掛かる、のだろう。

など聞こえたまふ(などと殿は御方にお話しなさいます)。

*馬場の御殿は、こなたの廊より見通すほど遠からず。 *「馬場」および「馬場殿」が六条院敷地の東端に専用に設けられていたことは、「少女」巻第七章第四段にある「東面は、分けて馬場の御殿作り、埒結ひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑ茂らせて、向かひに御厩して、世になき上馬どもをととのへ立てさせたまへり。」という記述から知られる。実は、「分けて馬場の御殿作り、埒結ひて」は漠然とそんなものかと読んでいたが、今になって中将殿が日頃から自宅の馬場で乗馬の鍛錬に励んでいたらしいことに漸く気付いた。「埒(らち)」は一般的に<決まり、極まりごと>の意味で使うが、元々は<馬場の周りの柵>のことらしく、「埒結ひて」は常設馬場を示していることになる。となると、「五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑ茂らせて」は正に今日の為にと言う意味だと改めて気づいたが、「にて」は馬場と馬場殿の常設が五月五日の為<なので>という意味ではなくて、馬場を常設するに付いて馬場殿が端午の節会の晴舞台になるので<であり、その時に映える様に馬場殿近くの庭を端午の節句に相応しいように整備した、という造園方針の具体的な意味合いで、当文が挿入句語りになっていることにも今になって漸く分かった。「向かひに御厩して」は、その庭池の向こう先、とは庭池が馬場殿の南側にあり、その更に南側に「御厩(みまや、御馬小屋)」があるという説明で、其処に「世になき(最上の)上馬ども(じゃうめども、名馬数匹)」が殿や中将の乗馬用に飼われていた、という事らしい。それでも、この文だけで全体の構成が分かる筈も無く、「季刊大林」サイトの「六条院の考証復元」ページを参照して、六条院の全体像を私は理解した。そして同ページの「六条院の復元図」および「六条院全体配置図」を見て、此处の「こなたの廊」は東の対から南の釣殿へ渡す<中門廊>と、見做した。「見通すほど」は二階同士が向き合った<直線距離>みたいなもので、実際に行き来するのは回り道を要するし、向き合うことを本義として設計されてはいないが、見合おうとすれば出来る構造に成っている配置関係を示していそうで、それが「遠からず(近い)」と書いてある。近いのは馬場殿と中門廊ということだが、となると大林組の玉上モデルよりも馬場殿はずっと南の馬場中央付近で多分、中門より南だったような気がする。でなければ、競技のハイライトが見えないだろうし。もしかすると、夏の町には釣殿がなくて、ほぼその位置に対屋ほどの馬場殿があったか、釣殿とは別の東外側だとしても、馬場殿は釣殿近くに在ったのだろう。

「若き*人びと、*渡殿の戸開けて物見よや。 *「ひとびと」は女房たち、と注にある。 *「わたどの」は中門廊、と見る。中門廊は白壁に連子(れんじ、等間隔スリット)窓がある造りであったとすれば、その合わせ連

子をずらして開けたのだろうか。何せ中門は玄関口なので南正面に妻戸があったり、勝手口としての枢戸や跳ね上げ戸や引き戸が廊下の邸内側や外壁側に設けてあっても不思議は無さそうで、良く分からない。とにかく廊下から馬場殿を見ることは出来たようだ。

*左の司に(左の近衛府に)、いとよしある*官人多かるころなり(とても家柄の良い職長が今は割と多いのだ)。少々の殿上人に劣るまじ(彼らの将来性は、並の重役にも引けを取らないだろう)」 *「ひだりのつかさ」は<左近衛府>の明示だ。 *「くわんじん」は<平安時代、位の低い役人。特に、近衛府の将監以下の称。>と大辞泉にある。「将監」は「じょう(判官、四等官の中の第三等官)」と古語辞典に説明される。ざっと<下級の役職者>で、大将・中将・少将に次ぐ地位の者のようだが、その身分差は歴然としていて、作戦本部と現場指揮の差であり、部長と課長の差、いわば職長だろう。位階で見ても五位と六位の差であり、正に殿上と地下の差ということなのだろう。ところが、その職長が良家の子息揃いで、今の幹部連中よりも出世が見込めるといのは、蔵人や近衛という天皇の側近が幅を利かせるに至る体制の世襲化、とは安定化であり固定化だが、が進んだという時代の実相を示している。

とのたまへば(と殿が仰ると)、物見むことをいとをかしと思へり(女房たちは馬弓見物をととても楽しみに思ったのです)。

対の御方よりも(姫が居る西の対からも)、*童女(未通の若女房)など、物見に渡り来て(見物に遣って来て)、*廊の戸口に(中門廊の戸口である南正面玄関に)御簾青やかに掛けわたして(上部の目隠しには新しい御簾を華やかに掛け渡して)、今めきたる*裾濃の御几帳ども立てわたし(下部の目隠しには裾黒の流行の色調の御几帳を立て渡して)、童(わらは、更に年少の女の子や)、下仕へなどさまよふ(世話係の女中などが付きまどっていました)。 *「わらはべ」は<子供>と古語辞典などに説明されるが、下に「童、下仕へなどさまよふ」とあるので、この「童女」はどうも<若女房>らしく、それをわざわざ「わらはべ」と言うのは、未通の処女を意味している、としか思えない。それに元々「童わらは」自体にしても、それなりの家柄ないし血縁の子供で、奉公とは言え、基本的には側近女房の見習い、ということなのだろう。また「しもづかへ」は下級女中で、良家の家柄ではなく、側近女房の部下くらいの身分であり、年は必ずしも若くはないかも知れない。その位の人々の生活感については全くの庶民などとはとても言えないし、実際には権威主義か人物本位かは人間関係だから各人各様だろうが、普通の人の生活感の延長線上と見て、下級役人と若女房、役人の従者と下臈、などは良い仲に成り易い立場同士と考えて良さそうだ。その辺の事情が、次の文で語られている描写の情緒なのだろう。 *「らうのとぐち」は開け放たれた正面玄関だろう。柱一つ間口の幅の中門廊の妻戸が南向きに開いている。其処に若女房たちが押し寄せて、向かい側の馬場殿を見る、とすれば、やはり馬場殿は釣殿の位置にある。中門廊の南側は、そのまま馬場殿の入り口だったかも知れない。 *「裾濃の御几帳(すそごのみきちやう)」は、注に<御几帳の上は白く下にいくほど紫または紺に濃く染めたもの。>とある。

*菖蒲襲の相(しゃうぶがさねのあこめ)、*二藍の羅の汗衫(ふたあゐのうすもののかざみ)着たる童女ぞ(着た若女房は)、西の対のなめる(対の姫付きであろう)、*好ましく馴れたる限り(好奇心いっぱい屈託なく男たちを評する者たちばかりの)*四人(よたり、四人組です)。下仕へは、*棟(あふち、薄紫色)の裾濃(すそご、裾に行くほど色が濃い)の*裳(も、裾飾り)、撫子の(薄紅梅色の着物に)若葉の色したる(黄緑色の)唐衣(からぎぬ、飾り着で)、今日よそひどもなり(いずれも端午の日の正装です)。 *<「菖蒲襲」は表青、裏紅梅または白の襲。「相」は童女の表着。>と注にある。 *「二藍の羅」は、注に<紅と藍の中間色、また二度染の薄紫色の童女の表着。>とある薄地の織物で、<

「汗衫」は女房の唐衣と裳に相当する童女の晴着。>ともある。*「このまし」は最も当たり障りなく言えば<好感が持てる、感じが良い>ということだろう。それを拵げて<見た目が良い、美しい>のようにも言えるかも知れない。しかし、この場面の描写は若い男女の艶かしさであり、多分それが当時の端午の節句の情緒だったのである。六条院を舞台に漠然と「美しい」と言うのも悪くはないだろうが、それを言う意義は少ない。実は、「好まし」には<好色めいた>との説明も古語辞典にある。むしろ此处は、その意味で使われている、少なくともその含みはある、と読みたい。ただ、「わらはべ」は処女らしいので<好色な>というよりは<好奇心いっぱい>かとは思ふ。同様に「馴る」は、およそ<豊富な経験で緊張しない>という意味だろうが、「世慣れ=男馴れ」している訳ではないし、「世慣れ=行事馴れ」している事でもなさそうで、むしろ逆説めくが「世慣れていない=子供っぽい無邪気さ」で目にした男たちを「カックイ」とか「ヘンナノ」とかく畏まらず口走る>という描写、かと思ふ。*「たり」は<人数>を示す接尾語とあるが、やはり「とあり」の意味を残して、ある属性を持つ集団の<員数>のように見える。例え、「ひとり」でも。*「棟(あふち、オウチ)」は<センダンの古名>と大辞泉にあり<襲(かさね)の色目の名。表は薄紫、裏は青。一説に、表は紫、裏は薄紫。夏に用いた。《季 花=夏 実=秋》>ともある。「センダン」の木はWebサイトの写真で幾つか見たが、五月に咲く遅咲きの花が薄紫だった。*「裳」は表着の上に腰に付けて後に長く引きずる飾り布で、「唐衣(からぎぬ、飾り上着)」と合わせて女房の正装を成す、とのこと。袴姿に着物を重ね着する和装が進んだ宮中であって、律令制定当時の先進文明服であった唐韓装束の名残を、主従関係の象徴として尊重した意味合い、とも説明される。それにしても、下仕へでも着用したのは六条院の格式かも知れない。

こなたのは(東の御方の童女たちは)、*濃き一襲に(こきひとがさねに、紫の単衣を重ね着した上に)、*撫子襲の汗衫などおほどかにて(紅梅色に緑色が覗く晴れ着で受けて立つ構えで)、おのおの挑み顔なるもてなし(対の童女たちと優劣を競い合っているような気負いが)、見所あり(面白い見所です)。*「濃き」は<濃い紫色>。「一襲」は<単衣(ひとえぎぬ)を二枚以上重ねたもの。女房が夏に用いた。>と大辞泉にある。*「なでしこがさね」は<表が紅梅で裏が緑の袷>。着物と晴着の色合わせが、対の童女と逆で対照的だ。

若やかなる殿上人などは(見物客の高級官僚の中で、気の若い者は)、*目をたててけしきばむ(この渡殿の女たちの方に目を奪われて上気します)。*「目を立つ」は<注目する>と古語辞典にあるが、実際に見えたのはせいぜい袖端か、辺りをさまよう子供たちの姿だけだったのである。後は、ざわめいた人ばかりと漏れ聞こえる高い声に若い女の気配を感じて気を取られた、という所かと思ふ。今の「注目する」にも、実際に見る事の他に<注意を向ける>の意味がある。

未の時に(ひつじのときに、午後二時頃に)、馬場の御殿に出でたまひて(殿は馬場殿にお出になって)、げに(お話にあった通りに)親王たちおはし集ひたり(皇子たちも集まっていらっしゃいました)。手結ひの(てつがひの、左近衛連中の馬弓試合も二人一組で整然と勝負を競う)公事には(おほやけごとには、公式な個人戦とは)さま変りて(すっかり変わって)、*次将たち(すけたち、中将と少将が)かき連れ参りて(それぞれ自軍を牽き連れて参戦する団体戦で)、さまことに今めかしく遊び暮らしたまふ(応援合戦も若々しく遊んで過ごしなさいます)。*「次官(すけ)」は<律令制の四等官序列に於いて次席の地位>とあり、近衛府にあつては中将(定員一)と少将(定員二)とのこと。

*女は(女には)、何の*あやめも知らぬことなれど(競技方法は分からなかったが)、*舎人どもさへ(顔見知りの護衛官まで)艶なる装束を尽くして(試合用の晴着を着て)、身を投げたる(参戦している)手まどはしなどを見るぞ(苦戦振りなどを見るのは)、をかしかりける(楽しいものでし

た)。 *この「をんな」は<妻>ではなく、一般成人の<女>。 *「あやめ」は「文目(違い、筋道、取り決め)」で、この場合だったら<競技方法>だろうが、当然「菖蒲」に掛けた洒落言葉ではある。 *「とねり」は<家の者、家人、家来>を意味する言い方で、特に<古代、天皇・皇族の身边で御用を勤めた者。>を言う場合や<律令制で、皇族や貴族に仕え、護衛・雑用に従事した下級官人。>を言う場合もあり、また<牛車(ぎっしゃ)の牛飼いや乗馬の口取り。>を言う場合もあるようだが、此処では六条院の女たちが見知っている左近の者と思われるので、院の警護に派遣されて来ていた下級官人、と見る。

*南の町も通して(馬場は南区画まで通して設営されて)、はるばるとあれば(長距離だったので)、*あなたにもかやうの若き人どもは見けり(春の町でも同じように若女房たちは競馬見物に興じました)。 *「南の町も通して」は、馬場が敷地東面の夏の町から春の町まで通して設けられていた事の明示。 *多くの場合に春の町は殿の住まいなので「こなた」だが、今は殿は夏の町の馬場殿に居るので「あなた」。

「*打毬楽(だきゅうらく)」「*落蹲(らくそん)」など遊びて(などを勝者側が試合毎に奏舞して)、勝ち負けの乱声ども(らんじゃうども、合図の笛に)ののしるも(大騒ぎするのも)、夜に入り果てて(日が落ちれば)、何事も見えなくなり果てぬ(何も見えなくなって終わりました)。 *「打毬楽」と「落蹲」は舞楽の曲名らしい。私は雅楽に素養がないので、具体的な説明文を読んでも何の音も舞姿も思い浮かばない。ただ、「花橘亭」サイトの「風俗博物館」レポートのページに、「落蹲」「打毬楽」および「迦陵頻」「胡蝶」の人形コスチューム写真の掲載があって、それぞれが番舞(つがいまい、左右対で一組)だったらしく、「打毬楽」が<左方>、「落蹲」が<右方>の勝ちを意味したようだ。

舎人どもの禄(護衛官たちへの褒美は)、品々賜はる(殿が身分に応じて賜われます)。いたく更けて(夜遅くになって)、人びと皆*あかれたまひぬ(見物客の貴人たちも皆お帰りなさいました)。 *「あかる」は「離る・別る」で<離れる、別れる、退出する>と古語辞典にある。「たまふ」とある「人びと」は貴人。

[第三段 源氏、花散里のもとに泊まる]

大臣は、*こなたに大殿籠もりぬ(此方に御泊まりなさいました)。物語など聞こえたまひて(いろいろなお話を御方様となさって)、 *「こなた」は<夏の町、北東区画の殿舎>。注には<源氏は花散里のもとに泊まる。久し振りのことである。>とある。それほど端午の節句であり、その為の夏の町だ、という作者の企画を感じる書き方。この夏の町は実に子息の本拠地であり、春の町の北側とはいえ、左中將の公人性を考えれば、一般の屋敷で言う勝手口とは格段に違う格式を持ち、実際にこうして多くの客人を迎え、且つ、それが私邸の一部という殿の権勢でもある。

「兵部卿宮の、人よりはこよなくものしたまふかな(他の人よりは優れているようだな)。容貌などはすぐれねど(顔立ちは然程に美しくはないが)、用意けしきなど(気遣いや物腰に)、よしあり(教養があつて)、愛敬づきたる君なり(好ましい人物だ)。*忍びて見たまひつや(ところで、此処だけの話として聞かせて下さい、)。よしといへど(世間の評判が良くて)、なほこそあれ(貴方の見識から見れば、やはり何か不足も有りましょう)」 *「しのびて」は口語文である。「隠れてこっそりと」には違いないが、此処では<此処だけの内緒話として>という意味だ。「見」は<見解、意見>。「給ひつ哉」は<して呉れませんか>。通せば「しのびてみたまひつや」は<遠慮なく診立てて見て下さい>。

とのたまふ(と殿が仰います)。

「御弟にこそ(おんおとうとにこそ、宮は殿の弟君では)ものしたまへど(いらっしやいますが)、*ねびまさりてぞ見えたまひける(年上のように老けて見えなさいます)。年ごろ(もう何年も)、かく折(こうしたお祝いの席には)過ぐさず渡り(欠かさずお見えになつては)、睦びきこえたまふと聞きはべれど(殿と仲良くなさつていらっしやるとお聞き致しておりますが)、昔の内裏わたりにてほの見たてまつりし(ご幼少の頃に御所内でお見掛け致したきりなので)、おぼつかなし(私にはお人柄は分かりません)。いとよくこそ(とてもご立派に)、容貌など*ねびまさりたまひにけれ(御姿は御成人なされたとお見受け申し上げました)。*帥の親王(そちのみこ、その弟君も)よくものしたまふめれど(ご立派でいらっしやいますが)、*けはひ劣りて(宮様よりは貫禄不足で)、*大君けしきにぞものしたまひける(王族としてはごく普通というところでいらっしやいました)」 *「ねびまさる」の「ねぶ」は<成長する>意味と<老ける>意味とがある。此処では殿と比較して<老ける>が<増す>だから<年上のように老けて見える>。 *この「ねびまさる」は、宮自身の幼少時と比較して<成長する>が<増す>だから<すっかり成人する>。 *「帥の親王」は、皇子が俸禄を得る肩書きとして名目上で任官される大宰府長官で、赴任もしないし実務も無い。以前は兵部卿官が就いていた名誉職でもあるが、今は更に年下の皇子が就いているらしく、その人物評であるらしい。注には<桐壺院の皇子、源氏や螢宮たちの弟宮。ここだけに登場する人物。>とある。 *「けはひ」は<全体の印象>だろうか。「おとる」は比較下位だが、皇子を比較するなら同じ皇子とでなければ、此処だけの話にしても成立しない。 *「おほきみけしき」の「おほきみ」は<天皇の敬称>または<親王・諸王の敬称>と古語辞典にあるが、王族の弟宮に対しては他に言い方が無いと言うよりは、少し茶化した語感に思うが、何れにしても<王族として見れば>に言葉通りの意味は無いものと考えて、むしろ「けしき」の<遠景感>こそを語意と取りたい。「けはひ」が「けしき」では何とも頼りないが、詰まりはそういう事である。何の変哲もなく、印象に残らない、のだ。

とのたまへば(と御方が仰るので)、「ふと(ちょっと見だけで)見知りたまひにけり(全て御見通しだ)」と思せど(と殿はお思いだったが)、ほほ笑みて(ただ笑って聞いて)、なほあるを(更に続いた御方の話しにも)、良しとも悪しとも*かけたまはず(良し悪しは仰いませぬ)。 *「かく」は「懸く、掛く」で<何かの件に関して言及する>。

人の上を難つけ(人のことに難を付けて)、落としめざまのこと言ふ人をば(貶める様な事を言うのは)、いとほしきものにしたまへば(見苦しいとお思いなので)、

「*右大将などをだに(右大将のことなどを)、心にくき人にすめるを(御方の話では、優れた者としているようだが)、何ばかりかはある(大した事は無い、)。*近きよすがにて見むは(婿として見れば)、飽かぬことにやあらむ(不足が無いとは言えない)」 *「うだいしゃう」は右近衛府の長であり、当然に参議格の人物。対の姫に懸想文を遣した者の一人として既に紹介された藤原右家の有力者だ。 *「ちかきよすが」は、注に<近い縁者、すなわち婿として見たら、の意。>とある。

と、見たまへど(お考えになったが)、言に表はしても(言葉に出しては)のたまはず(仰いませぬでした)。

今はただおほかたの御睦びにて(今はただ気心の知れた話し相手の仲として)、御座なども(おましなども、お寝床なども)異々にて大殿籠もる(別々にして寝付きなさいます)。「などてかく離れそめしぞ(いつからこう床を別にしだしたかな)」と、殿は*苦しがりたまふ(殿は気詰まりが

ちに為さいます)。*「くるしがる」は<苦しい>ではなくて<苦しようにする>。本当に苦しいなら「苦しび給ふ」。「苦し」は<気まずい、不快だ、都合が悪い、つらい>など。

おほかた(大体に於いて)、何やかやともそばみきこえたまはで(何やかやともひがみ申しなさらず)、年ごろかく折ふしにつけたる御遊びどもを(ここ何年も季節ごとの催し事などを)、人伝てに見聞きたまひけるに(人づてに見聞きなさっていらしたのに)、今日めづらしかりつることばかりをぞ(今日の節句が珍しく此処で催されたことだけで)、この町のおぼえきらきらしと思したる(御方はこの町の輝かしい栄誉とお思いなのでした)。

「その駒もすさめぬ草と名に立てる、汀の菖蒲今日や引きつる」(和歌 25-05)

「馬も喰わないあやめ草、この日のあやで匂い立つ」(意訳 25-05)

*注に<花散里から源氏への贈歌。「香をとめてとふ人あるを菖蒲草あやしく人のすさめざりけり」(後拾遺集夏、二一〇、恵慶法師)を引歌とする。『完訳』は「「あやめ」は自分。「駒もすさめぬ」は、男に顧みられぬ女の嘆きの類型表現」と注す。>とある。「すさむ」は「凄む(勢いが激しくなる)」や「進む(気が向く)」や「荒む(嫌う)」と含みが多いが、此処では<気が向く、好む>の意で、それが打消しの助動詞「ず」の連体形の「ぬ」に条件付けて「草」を説明している。「こまもすさめぬ」は<馬も喰わない>だが、「その駒」の「その」は<折角に今日の馬弓に連れて来た>という「今日」の強調であり、「こま」は<脚>であり<寄り付く>ことの象徴なので、前句は全体で<普段は頓と御見限り>ということのをこの節句の馬弓に掛けて洒落て言い回した、のだろう。「汀の菖蒲」は「みぎはのあやめ」という読みで<水際のショウブ>の生態と<端午の菖蒲の節句>という日和と<明瞭な理由>という因果を込めた詠み方だろうか、物の序でに否応なく「殿が此方にお越しに成った」という皮肉っぽい卑下、に感じる。いや、本心ではなく、そういう戯れ歌かとは思いますが、丸々色気の抜けた乾き切った歌でないところが粹、なのだろう。

とおほどかに聞こえたまふ(と御方は決まり文句のように御詠みなさいます)。何ばかりのこともあらねど(何気ないご挨拶程度でしたが)、あはれと思したり(殿は感じ入りなさいました)。

「鳩鳥に影をならぶる若駒は、いつか菖蒲に引き別るべき」(和歌 25-06)

「菖蒲に懐く水鳥の、ツガイに習う弓の馬」(和歌 25-06)

*注に<源氏の返歌。「駒」「菖蒲」「引き」を受けて返す。「引き」は「菖蒲」の縁語。「若駒とけふに逢ひくるあやめ草おひおくるるや負くるなるらむ」(和漢朗詠集上、端午、一五七)を引歌とする。『完訳』は「「若駒」が自分。「あやめ」が花散里。仲のよい「にほどり」に、二人の仲を擬える」と注す。>とある。「鳩鳥(にほどり)」はカイツブリの古名で「汀、水際」を受けた詠い出し。ツガイで巣作り子育てをする習性と有り、馬弓の番付である「手結ひ(てつがひ)」にも掛けた言い方で、「影をならぶる若駒」で<貴方に寄り添う私>を言っている、ようだ。斯く言う私も丸で「知ったかぶりカイツブリ」で、カイツブリは滋賀県の県鳥とのこと。「あやめにひく」は<端午の節句に宮中でショウブの根を引き抜いてその大きさを競ったという根合わせ>の風習に掛けた言い回しとのことだが、文意としては「文目に引く(理に適う)」で、それが「いつか」との反語表現で「引き別るべき(離れ離れに成らねばならないのだろうか)」だから、後句は<別れ別れに成ることは無い>との慰め、ないし言い訳といったところ。

あいだちなき御ことどもなりや(涸れた歌の御贈答といったところでしょうか)。「あいだちなし」はくおもしろみがない、無愛想だ、遠慮が無い>と大辞泉にあり、「あいだち」は「愛(愛情、感情)」が「立つ(起きる)」のように説明されるが、確たる定説でも無さそう。が、これらの歌は理に走った言葉遊びで、恋愛感情を訴えたものではないから、「愛立ち無き」の説明は成立している。が、それはくつまらなく>もく工夫が無く>もく無遠慮>でもなく、その<涸れた味わい>を少なくとも当人たちは楽しんだ、と思いたい。「あはれと思したり」は形態描写ではないだろう。

「朝夕の隔てあるやうなれど(普段は離れているようでも)、かくて見たてまつるは(こうしてお会い致しますと)、心やすくこそあれ(落ち着けるものです)」

戯れごとなれど(ほんのご愛嬌までの言葉だったが)、のどやかにおはする人ざまなれば(御方がおっとりしていらしたので)、静まりて聞こえなしたまふ(殿も実感ありげに言いなしなさいます)。「たはぶれごと」はく冗談>とあるが、此処では耽溺感抜き<言葉の上のこと>という意味での<言葉遊び>だから、「おふざけ」ではなくて「おあいそ」であり、その割りにはしっとりとした口調だった、ということらしい。

*床をば(ゆかをば、帳台は)譲りきこえたまひて(殿にお譲り申し上げなさって)、御几帳引き隔てて大殿籠もる(御方は御几帳を隔てて布団にお入りなさいます)。気近くなどあらむ筋をば(共寝をしようという間柄を)、いと似げなかるべき筋に(御方はとても不釣合いなものに)、思ひ離れ果てきこえたまへれば(諦めきってお思いなので)、あながちにも聞こえたまはず(殿も強いて同衾にとは申しなさいません)。*この文の主語読取は貴人同士なので敬語表現からは分かり難いし、「おほのごもる」はつい男が寝ることに思い勝ちだが、貴人であれば子供にも使う言葉のようだし、文意からして、此処の文は是う読む他は無さそう。